OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「危機」に瀕した言語における変容について(1)
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2006, 16, p. 141-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71111
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「危機」に瀕した言語における変容について（1）

稗田 乃

1．はじめに

「危機」に瀕した言語において生じる変化は、通常の言語変化と異なる性格のものであるか、あるいは、同じ性格をもつものだろうか。この小論では、「危機」に瀕した言語において生じる言語変化がどのような性格をもつかを、東アフリカで話されている死語になる恐れがある言語の事例を検討することで考察する。

「危機」に瀕した言語とはなにか。言語が「危機」に瀕している、あるいは、死語になる脅威にさらされているといっても、その言語の話し手が紛争、災害、疫病などにより絶滅する脅威にあるわけではない。そのような例が皆無ではないが、言語が「危機」に瀕するとは、あるいは、死語になる脅威にさらされているとは、ある言語の話し手がみずからの言語を話すのをやめ、他の言語に交替することにより、かれらの言語が話されなくなることを意味している。現在、東アフリカにおいては２００近くの言語が既に死語になるか、死語になる危機におちいっているといわれている（Brenzinger, 1992）。

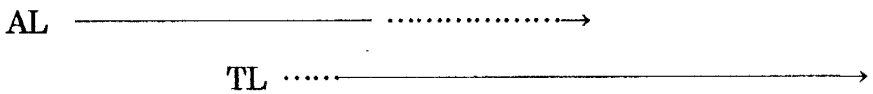
言語が言語交替により失われるスピードは、世界のグローバル化により加速している。電気もガスも水道もない辺境において、人々が携帯電話を所持していることは、世界のグローバル化を象徴している。世界のグローバル化は、辺境に住む人々の生活さえも急速に変えようとしている。民族の境界の内側でコミュニケーションをしていれば可能であった生活が、民族の境界外とのコミュニケーションをなくしては不可能になってしまった。そのために、東アフリカの国家レベルでのコミュニケーシェンは、旧植民地宗主国の言語にますます多くを依存することになる一方で、辺境でのコミュニケーションは、民族語のみに依存することをやめ、地域共通語に依存することを強めている。さらに、辺境でのコミュニケーションは、旧植民地宗主国の言語に依存しはじめている。

2．言語交替

言語が交替するためには、バイリンガリズムが必要条件となる。なぜなら放棄される言語（Abandoned Language，以下AL）を話していた人々が、かれらの言語をターゲット

言語（Target Language，以下 TL）に一挙に交替すると想像することはできない。AL から TL に交替する以前に、話し手が AL と TL を同時に話している時期が存在しなければならない。AL を話している話し手が TL に交替するする以前に、すくなくとも TL についていくらかの言語能力をもっていなければならない。さもなければ、かれらの情報伝達に大きな混乱が生じるであろう。すなわち、自然な考え方は、社会のレベルにおいても、個人のレベルにおいても、AL と TL が同時に並行して話されている時期が存在すると考えることである（図1）。図1において、AL と TL の線が重なりあう部分が、2つの言語がともに話されるバイリンガルの時期を表している。矢印の終点は、言語が死語になる時点を表している。点線は、言語が補足的に使用される時期を表している。

図1 言語交替



言語交替の条件となるバイリンガリズムについて概観する。バイリンガリズムには安定的バイリンガリズムと同化的バイリンガリズムが存在する。安定的バイリンガリズムにおいては、複数の言語が相補的に機能しあい、並行して使用される。安定的バイリンガリズムにおいて、複数の言語が使用される領域は相互に侵食されることはない。同化的バイリンガリズムでは、言語交替が伴なわれる。東アフリカにおいては、旧植民地宗主国の言語である英語、地域共通語であるスワヒリ語と、民族語によるバイリンガリズムは、安定的バイリンガリズムを形成しており、民族語どうしのバイリンガリズムは、同化的バイリンガリズムを形成しているといわれてきた。すなわち、英語、スワヒリ語と、民族語は、使用される領域が異なり、相補的に機能しあっていたと考えられた。英語は、司法、教育、行政などの領域で使用され、スワヒリ語は、マーケット、商用などの領域で使用され、民族語は、家庭などの領域で使用されると考えられてきた。

最近の世界のグローバル化は、英語、スワヒリ語と民族語のあいだにおいても、同化的バイリンガリズムを形成しつつあると考えられる。多くの人々が、あらゆる領域で英語、スワヒリ語などを、民族語とともに使用をすることを好みはじめている。家庭内においても、一切、民族語が使用されない事例が観察される。この場合、AL は、民族語であり、TL は、スワヒリ語、さらに、英語ということになる。

言語が死語になるという現象は、単に言語面での現象と捉えられないことはできない。社会現象として捉えることが必要である。言語が死語になる過程を社会的現象の観点から見てみよう。まずALとTLを話している社会において、なんらかの社会的要因によりALとTLの話される領域（Domain）に偏りが生じる。この社会的要因は、東アフリカにおいては、過去においては植民地支配であったろうし、現在ではポストコロニアリズムといったものであると考えられる。植民地期においては、英語はたんに侵略者の言語であり、スワヒリ語は軍隊の言語であった。この時期においては、英語、スワヒリ語、民族語は、それぞれが話される領域に偏りは生じなかった。つまり、東アフリカにおいては、それらの言語は、安定的バイリンガリズムを形成していたと考えられる。エチオピアの辺境部ではアムハラ語が侵略者の言語であり、軍隊の言語であった。エチオピアにおいては、アムハラ語と民族語が領域を分けながら安定的なバイリンガリズムを形成していた。

しかし、ポストコロニアリズム期に入ると、事態は変化する。侵略者の言語であった英語と軍隊の言語であったスワヒリ語が、あるいは、侵略者の言語と軍隊の言語であったアムハラ語が、本来の使用領域からその使用領域を拡大し、社会の様々な領域で使用されはじめる。ＡＬとＴＬの話される領域に偏りが生じはじめた。

ＡＬとＴＬの使用領域の偏りをもたらす社会的要因は、ＡＬの話し手にＡＬにたいする否定的な言語態度をもたらす。また、ＡＬとＴＬの話される領域の偏りは、ＡＬの話し手のＡＬにたいする否定的な言語態度を助長する。なぜなら、使用に不便な言語、すなわち、使えない言語にたいして肯定的な言語態度を話し手はもちえない。つぎにＡＬの話し手のＡＬにたいする否定的な態度は、次世代へのＡＬの言語引継ぎを遮断する。つまり次世代に言語を習得させるとき、ＡＬではなくＴＬを習得させることを好ましいとするため、次世代ではＴＬが第 1 言語として獲得される。ＡＬの話し手である親世代は、次世代に向かって積極的にＴＬで話しかけることで、この目的を達成する。ただし、親世代間のコミュニケーションは、まだ、ＡＬで行われるため、次世代はＡＬを耳にする機会をもつことはある。その結果、次世代は、第 2 言語としてＡＬの知識をもつことは可能である。この時期をＡＬとＴＬの第 1 言語と第 2 言語の交替期と呼ぶ。第 1 言語と第 2 言語の交替は、ＡＬとＴＬの使用領域の偏りを増幅させる。TL を第 1 言語として話す話し手が、増大するから、TL の使用領域はますます拡大する。ＡＬの使用領域がますます縮小し、ＴＬの使用領域が拡大する。最終的にＡＬは、ＡＬをもともと話していた集団のアイデンティティを表現するためだけに使用される。たとえば、秘密語、宗教儀礼に用いられる言語

など、ある特定の目的をもった言語として用いられる以外に、ＡＬは使用されなくなる。そして、ついに、ＡＬはまったく形をとどめなくなる（図２）(2)。

図２ 死語のプロセス

社会的要因 → 言語使用領域の偏り

↓

ＡＬにたいする

否定的言語態度 → 次世代へのＡＬの

言語引継ぎの遮断

↓

ＡＬにたいする → 第１言語と第２言語交替

否定的言語態度 ↓

ＡＬの使用領域の縮小

↓

ＡＬの限られた目的の

言語としての使用（秘密語など）

↓

ＡＬの消滅

ＡＬが第１言語として話されなくなった段階、ＡＬの使用領域が縮小した結果、ＡＬがある限られた目的にのみ使用される段階、最後に地球上から形をとどめなくなった段階、これらのどの段階を言語の死語と考えるかは問題ではない。

３．言語は変化する

言語が通常の状態において変化するのは当然のことと考えられる。では、言語が死語の脅威にさらされているとき、言語はどのような変化をおこなうのであろうか。その変化は、通常の状態での変化と同じ性格のものなにか、それとも、異なる性格のものなのであろうか。

アフリカで話されている言語の中には、数を数えるとき、モノの形状とかモノの性状に応じて数え方が違う言語（たとえば、バントゥ語など）が存在する。そのようなアフリカの言語におけるモノの数え方を、若い日本人に説明するとき、日本語におけるモノの数え

方をたとえにして教えることがある。たとえば、アフリカのある言語では、人間を数えるとき、動物を数えるとき、人間が使う道具を数えるときなど、それぞれ異なる数え方をする。日本語でも同様のことをおこなう。日本語は、人間を１人、２人と数え、犬を１匹、２匹と数え、鉛筆を１本、２本と数える。

日本人の若い人に、イカ（海で泳いでいるイカ）を一杯と数えると説明したとき、１人の若い日本人が、「先生、イカがたくさんと言う意味ですか」と質問したことがある。その若い日本人は、イカを１杯、２杯と数えることがない。さらに、若い日本人たちは、ウサギを１羽、２羽と数えないし、鱈子を１腹、２腹と数えない。若い人の日本語におけるモノの数え方は、思った以上に少ないことがわかる。現在の若い日本人の日本語は、モノを数える表現が減少している。モノの数え方が変化していると考えられる。

しかし、筆者自身の日本語の使用を観察すると、筆者の日本語も若い日本人の日本語と、さほど違いはない。実際、自身の言語行動を観察してみると、筆者は、ペットショップの前でウサギを１羽、２羽なんて数えていない。１匹、２匹と数えている。知識としては１羽、２羽と数えることは知っている。鱈子を１腹、２腹と数えることは知っている。しかし、筆者自身が「鱈子を１腹ください」と魚屋で言わない。

若い日本人の日本語において数の数え方のパターンが減少しているのは、日本語の「乱れ」ではなく、通常の日本語の変化と考えられる。そのことは、モノの数え方のパターンが減少しているのが若い日本人の日本語だけではないことからわかる。

言語の変化は、たんに表現方法が減少するだけではない。たとえば、若い日本人は、いわゆる、「わかもの言葉」を話す。「わかもの言葉」は、新しい表現方法を開発する。「やばい」という形容詞は、本来、否定的な意味をもつ。しかし、若い日本人がその形容詞を使用するとき、肯定的な意味で使用することができる。この事例は、古い語に新しい意味を付与する例であろう。このように、「わかもの言葉」は、新しい表現方法を開発し、発達させる。しかし、表現方法が失われたり、表現方法が変化したり、新しい表現方法が開発されるのは、たんに「わかもの言葉」と呼ばれるもののなかだけではない。日本語のあらゆる変種になんらかの変化が観察される。これら、日本語のなかで観察される変容は、言語の通常状態での言語変化であると考えられる。

アフリカではこのような通常の言語変化であると説明できないような言語現象が観察される。通常の言語変化とは思えないような変化が観察されるのは、死語の脅威にさらされている言語、「絶滅」の危機に瀕している言語においてである。

以下において、筆者が調査したアフリカの言語において、しかも、死語の脅威にさらされている言語において、どのような変化が生じているかを観察する。そして、その言語変化は、通常の言語変化とどのように異なっているかを考察する。

4．死語の脅威にさらされている言語における変化

筆者が、アフリカ、エチオピアで調査した言語は、コエグ語と呼ばれる。話し手の数はおよそ３００人である。言葉の変容についての観察に入る前に、調査地がどのようなところか、話し手はどんな生活をしているかを概観する。また、コエグ語が死語の脅威にさらされている言語であることを証明するために、とくに、話し手の言語生活について概観する。なぜなら、この小論のはじめに議論したように、言語が死語の脅威にさらされていることを、社会的要因を考察することなしに、証明することは不可能である。

コエグ語は、エチオピア西南部、オモ川の川辺で話されている。コエグ語の話し手たちは、本来、オモ川の堤防に散在して住居をかまえるが、1988 年から 1990 年の調査の時点では、他の民族からの脅威を避けるためにクチュルという村に集まり住んでいた。その後の情報によれば、民族紛争の緊張が和らいだため、再びオモ川の堤防に散在して家を建て、クチュル村は放棄された。コエグ語を話す人々の周囲には、カラ語を話す人々とニャンガトム語を話す人々がとりまいている。

コエグ語は、系統分類に関して、ナイル・サハラ言語ファイラムの中のスルマ言語群に所属し、カラ語は、アフラジアン言語ファイラムに所属する。ニャンガトム語は、ナイル・サハラ言語ファイラムに所属するが、その中のナイル諸語に所属する。これら３つの言語は、系統的にも離れており、また、言語構造も違っており、互いに理解することはできない。

既に述べたように、コエグ語を話す人々の数は、およそ３００である。話し手の数が少数であれば、その言語は、「危ない言語、生存の危機に瀕している言語」であると単純に断言できない。なぜコエグ語が生存の危機に瀕している言語であるかを説明しなければならない。具体的には、言語交替の可能性が存在することを証明しなければならない。そこで、社会言語学的調査を行うために、村に存在する住居を１軒、１軒、訪ね歩いて、３００人のコエグ語の話し手が実際、言語をどのように使っているかを調査した。おおよその結果は以下のようにまとめることができる（3)。

聞き取り調査によれば、コエグの人々は、かれらの第 1 言語であるコエグ語のほかにカラ語とニャンガトム語を第２言語として話すことができる。カラ語とニャンガトム語は、

近隣に住む民族の言語である。コエグの村には学校などは存在しないから、コエグの人々は、日常生活のなかでカラ語やニャンガトム語を習得する。コエグの人々は、かなり若い時期にカラ語をマスターしていることがわかる。およそ 8 才頃までには、カラ語を習得する。しかも、その習得の時期に関しては、男女差がない。一方、ニャンガトム語に関しては、男性が 8 才をこえた頃から習得率が高くなる。女性は、20 才以上になって、ニャンガトム語を話せる人の数が増加する。社会言語学の一般的な知見によると、第 2 言語が社会のなかで成熟すると、第2言語の習得率や習得の時期に男女差がなくなることが知られている。このことから、カラ語は、コエグの人々のあいだで、第 2 言語として既に成熟していることを示している。また、ニャンガトム語は、第2言語としての習得率や習得の時期に男女差が存在することから、まだコエグ社会のなかで第 2 言語として成熟していないといえる。コエグの人々の、カラの人々とニャンガトムの人々との歴史的関係からも、その事実は裏付けられる。コエグの人々が、ニャンガトムの人々と密接な関係をもちはじめたのは最近になってからである。それにくらべて、カラの人々とは、コエグの人々は古くから密接な民族間関係を構築していた。

聞き取り調査は、コエグの人々が若い時期にカラ語を習得していると答えたことを示した。つぎに、コエグの人々がカラ語の知識を、実際に、どの程度もっているのかを、語彙に関する知識をたずねる試験をして、確かめた。この試験でもコエグの人々がカラ語の知識を十分にもっていることが確認された。8 才以上のコエグの男女は、カラ語の語彙に関する知識をたずねる試験に、８０%から９０%の正解率を示した。同様の試験をニャンガトム語に関しても行った。ニャンガトム語に関しては、コエグの男性が 18 才以上になって、かなり高い正解率を示したが、女性は、20 才以上になっても高い正解率を示した者は少数であった。この語彙に関する知識をたずねる試験の結果においても、コエグの人々が第 2 言語としてカラ語を十分に習得してしており、また、カラ語はコエグの社会のなかで第2言語として成熟していることを確認できた。

ところで、言語交替の必要条件がバイリンガリズムであることは既に指摘したとうりある。コエグの人々が第2言語を話す能力が十分にもつということは、コエグの人々が言語交替をして、コエグ語を話さなくなる可能性があるということを示している。一方、反対にコエグの隣に住む民族であるカラの人々は、コエグ語を学んでいない。したがって、可能な言語交替の方向は、コエグ語からカラ語へであると考えられる。

しかし、いくらコエグの人々がバイリンガルになっていたとしても、コエグ語からカラ

語への言語交替をするとは限らないと主張することもありえる。コエグ社会におけるバイリンガリズムが安定的バイリンガリズムを形成している可能性もあるからである。そこで、カラ語がコエグの人々の社会にどれだけ浸透しているかを調べた。コエグの人々が、コエグ語とカラ語を日常生活においてどのように使用しているかを調査した。すなわち、相手が誰だとコエグ語、あるいは、カラ語を使うか、また、どんな話題のときにコエグ語、あるいは、カラ語を使うかを調べた。その調査の結果は、以下のようにまとめることができる（4）。

筆者の調査によると、コエグの人々は、相手がコエグの人々であっても、カラ語を使っている。相手が同世代であろうとも、年上の人であろうとも、年下の人であろうとも、あるいは、相手が異性であろうが、同性であろうが関係なく、コエグの人々は、コエグ語を使用する。それは、たとえば、日本人が日本人に向かって、英語で話しかけるようなものである。日本人が、相手が老人であろうと、子供であろうとも、日本人に英語で話しかけるようなものである。

また、コエグの人々は、会話の内容がどんな話題であろうとも、コエグ語だけではなく、カラ語をも使用する。これらの事実から、カラ語が言語使用領域を拡大していることは明らかである。しかも、男女の性に差はない。社会言語学の成果によると、バイリンガリズムが成熟すると、第2言語の使用に性差が存在しないことが知られている。コエグの人々のなかでコエグ語とカラ語のバイリンガリズムは、十分に成熟していることがこれで分かる。

これでもまだ言語交替が行われるかどうか証拠はないということも可能である。実際に、この村で、親たちは、生まれてきた子供にコエグ語で話しかけている。その結果、小さな子供でも最初に身につける言語はコエグ語である。この村に関しては、コエグ語がかれらの第 1 言語になっている。この限りにおいては、しっかり、親から子供へコエグ語が継承されているので、言語交替はおこらないように思われる。

しかし、実は、もう既に言語交替をしてしまった、あるいは、言語交替をする過程にあるコエグの人々が存在する。筆者が調査した村の南に、コエグ語を第1言語として話す300人の人々のほかに、およそ２００人のコエグの人々が、隣の民族、カラの人々のなかで生活している。この 200 人の人々はコエグ語を知っているが、コエグ語は、かれらの第2言語となっている。彼らは、既にカラ語を第1言語として話している。親たちは、生まれてきた子供にカラ語で話しかける。あるいは、親たちは、子供にカラ語で話しかけること

を好む。その結果、子供たちは、カラ語を第１言語として身につける。祖父母などはまだコエグ語を話したりするから、また、親どうしもコエグ語で会話したりするから、子供たちは、コエグ語を聞く機会をもつ。そのため、子供たちには、かろうじて第２言語としてコエグ語を習得する機会が存在する。しかし、老人世代がいなくなると、確実に、これら２００人はコエグ語を話さなくなる。つまり、言語交替が生じる（5)。

このような実例から考えて、また、コエグの人々を取り巻く民族間の社会的、政治的環境から考えても、筆者が調査した村の３００人は、まだ言語交替はしていないが、いつ何時、言語交替をしても不思議ではない状態にある。

これらの社会言語学的事実から、コエグ語が「生存の危機に瀕している言語である」ことは疑いないと思われる。コエグ語が死語の脅威にさらされている言語であると分かった。それでは、このような「生存の危機に瀕した言語」においてどんな現象が生じているのか、実例を示したい。

５．コエグ語における複数形成

コエグ語の複数形をつくる方法は、いたって簡単である。若干の音の変化はあるが、基本的には、単数形の語幹の末尾に-an をつけると複数形を形成できる（表１)。

表１　コエグ語の複数形

単数形	複数形	
puup	puup-an	「白髪」
shubo	shub-an	「頭」
bua	buaw-an	「腕」

単数形が母音で終わっていれば、その母音を脱落させて、接尾辞-an を付加する。あるいは、単数形が２重母音 ua で終わっていれば、接尾辞-an の前に半母音 w を挿入する。単数形が子音で終わっていれば、接尾辞-an を単数形に付加するだけで、複数形をつくることができる。

こんな簡単な事実を見つけるのが、かなり困難である。なぜなら、コエグ語では、名詞に、「２」、「３」、「４」などの数詞や、「多い」などの数量詞など、複数を表現する修飾語が後続すると、名詞が複数のモノを指示する場合でも、名詞そのものは、形式としては、単数形を用いるという規則がある（コエグ語の無標の語順では、名詞は修飾語に先行する)。

つまり、名詞句の一部に複数性を表示するものがあれば、名詞そのものは、複数形となる必要はない（表２）。

表２ コエグ語の複数表現

imish	juano
野牛	多い
「多くの野牛」	
hur	daa
人	２
「２人の人」	

「多い」を意味する修飾語、juanoが名詞の後続しているので、名詞、imish「野牛」は単数形になっている。「多い」という形容詞は複数性を表示するから、名詞そのものを複数形にする必要はない。また、数詞、daa「２」が名詞に後続するので、名詞、hur「人」は、単数形になっている（imish「野牛」の複数形は、imish-anであり、hur「人」の複数形は、hur-an）。「２」という数詞は、本来的に複数性を表示する。

言語を記述するための調査において、どのような方法が一般的に用いられるか不明だが、名詞の複数形を聞き出すために、たとえば、「「鳥」はどういうのですか？」と聞いて、さらに、「たくさんの鳥はどういうのですか」と相手に聞くのが普通であろう。コエグ語でこのように質問すると、先ほどの規則、修飾語がすでに複数の意味があったら、名詞は単数形にするという規則が働く。したがって、コエグ語の話し手は、「鳥」の単数形に、「多い」を意味する形容詞をつけて答える。

コエグ語は、筆者が調査する以前には、文法書も辞書も存在しなかった。しかし、コエグ語と系統的に近くて、言語構造が似ていると予想される言語については、簡単な調査がなされていた。それらからの知識によれば、コエグ語も名詞の複数形をもち、その形成法は、かなり複雑であるはずだった。名詞の複数形を、是非に聞き出すために、複数を意味する数詞をつけて質問することを試みた。すなわち、「２羽の鳥はなんて言うのですか」と、数詞をつけて聞いた。しかし、数詞、「２」も、本来的に複数であるという意味をもつので、数詞「２」が名詞に後続する場合、名詞そのものは単数形が用いられる。どのようにしても複数形を聞き出すことができない。コエグ語に複数形成が存在することが分か

ったのは、直接的な言語調査のときではなく、コエグ語で会話をしていたときに、偶然、コエグの話し手が名詞の複数形を用いたからである。

コエグ語と系統的に近い関係にあり、構造が似ていると予想される言語については、既に調査されていた言語もあった。それらの言語記述から考えられるコエグ語のもともとの複数形成法は、複雑であったと想像できる。たとえば、バアレ語の複数形成法は、表3のようになる（6）。

表3 バアレ語の複数形成

単数形	複数形	
kou	kou-th-ta	「ニワトリ」
UlUmE	UlUmE-c-ca	「ダチョウ」
dIla	dIla-nya	「槍」
aga	aga-dhi	「舌」
gangu	gang-een	「道」

表3の例は、バアレ語における複数形成法のほんの1部である。コエグ語が属するスルマ言語群に所属する言語は、普通、多くの種類の複数形成法をもっている。その複数形成法は、複雑であり、十分に明らかになっていない。しかし、おおよその規則として、以下のことが考えられる。

名詞は、その名詞の意味にしたがって、異なる複数形成法が選択されると思われる。具体的には、名詞の意味にしたがって、異なる形式をした接尾辞が付加されると考えられる。たとえば、「家畜を追う牧童」とか、「農民」とか人間を意味する名詞は、ある複数形をつくる接尾辞を付加されるが、鳥の名前であれば、別の複数接尾辞を付加され、動物の名前であれば、また、別の複数接尾辞を付加されると考えられる。それは、まるで日本語がモノを数えるときに、モノの形状や性状で数え方が違うのと同様に、これらのスルマ言語群に所属する言語においては、複数形をつくるときに、名詞が指すモノの形状や性状にしたがって、異なる複数形成法をおこなっていたと考えられる。しかし、コエグ語は、そのような複雑な複数形成法を変化させて、いたって簡単な規則にしてしまった。

上で述べたようにコエグ語の複数形成の変容を仮定するなら、複雑な複数形成法がコエグ語においても存在したという証拠を提出する必要がある。なぜなら、コエグ語は、書か

れた記録など存在しないので、過去の姿がどんなものであったか知ることは不可能だからだ。たとえ、コエグ語には過去に複雑な名詞の複数形成法が存在したと主張したとしても、それはコエグ語と系統的に近い言語からの推察であって、けっして証拠のあるものではない。しかし、幸運なことに、コエグ語が過去に複雑な名詞複数形成法をもっていたことを示す証拠がある。

コエグ語が属するスルマ言語群に所属する言語は、名詞に複数形をもつばかりではなく、形容詞にも複数形を持つ。コエグ語では、形容詞の複数形も単純な形になってしまっている（単数語幹に接尾辞-an を付加することにより、形容詞の複数形は形成される)。ところが、幸運なことに、ほんのわずかな、そして、よく用いられる形容詞だけが、不規則形として複雑な形をした複数形をもっている。たとえば、英語においても不規則な複数形をもっている名詞が存在するのと同様である。表４は、コエグ語の不規則な形容詞の複数形成法を示している。

表４ コエグ語の不規則形容詞の複数形

単数形	複数形	
tac'i	tatac'an	「大きい」
diini	aishaishan	「小さい」
kabe	kabekabeyan	「中くらい」

表４からわかるように、コエグ語も、コエグ語と系統的に近い言語がもっているのと同様の複雑な複数形成法をもっていた（表３、バアレ語の複数形成を参照)。コエグ語において、複数形成法は、通時的に変化した結果、現在の一見は単純な形成法になってしまった。しかし、一部の形式は、つまり、よく使用される形容詞は、不規則形として複雑な形式をした複数形を保持した。既に指摘したように、名詞に修飾語がつくとき、名詞句が指示するモノが複数である場合、修飾語のほうが複数形になるか、あるいは、複数性の意味をもつ修飾語になる。そして、名詞は常に単数形が用いられる。したがって、形容詞が、名詞よりも、複数形の使われる頻度が高い。また、複数であるモノを指示する場合は、名詞が、数詞や「多い」など、複数性を本来的に意味する修飾語をともなうことが普通であろう。したがって、一部の、しかも、よく使用される形容詞の複数形が、通時的変化を受けずに不規則形として残っても不思議ではない。その通時的変化とは、多くの複数形をつ

くる接尾辞から、ただ１つの接尾辞のみを選んで使用するというものであった。

不規則形として保存された複数形から、コエグ語は、過去に複雑な複数形成法を持っていたことが明らかになった。しかも、それは、スルマ言語群の言語が現在、もっている複数形成法と似たも形成法であったと想像できる。結論として、コエグ語は、複数形成法を、一見、極めて単純な形成法に変化させた。しかも、他のスルマ言語群に所属する言語がいまだに複雑な複数形制法を維持しているのもかかわらず、コエグ語だけがこの通時的変化をおこなった。なぜコエグ語だけが、このような、一見、極めて単純な複数形成法への変化をおこなったのだろうか。その原因は、コエグ語が、「危ない言語」「生存の危機にある言語である」からと考えられる7)。

しかし、複雑な規則を簡単な規則に変化させることは、死語の脅威にさらされている言語にだけ生じるのではなく、死語の脅威にさらされてない言語においても、生じるのではないかとも考えられる。それでは、死語の脅威にさらされている言語において生じる変化は、通常の言語変化とどこが異なるのか。

６．死語の脅威にさらされている言語での変容と通常の言語変容

この小論の初めに、日本語の数の数え方が変化していると指摘した。それでは、日本語においても、コエグ語が歴史的におこなったことと同様に、複雑な数の数え方をやめて、１つの数え方しかなくなってしまうことを想像してみよう。全てのモノを、１個と数えることにする。人間でも、動物でも、鳥でも、たとえば、先生、１個、犬、１個のように数えることになると想像しよう。何の問題もないと考えることもありえる。実際、数を数えることに関しては、なんら問題がないように思われる。しかし、多くの分類詞が存在すること、つまり、数を数える方法に多くのやり方が存在することは、単にモノの数を数えるという機能だけではない、他の役割をもっている。それは、形式ばった話し方においては、できるだけ多くの分類詞、つまり、数の数え方が使いわけられることである。日本語の分類詞には、このような数を数えるだけではなく、実用的な機能がある。もし、数の数え方が、なんでも１個と数えるという通時的変化が起これば、形式ばったスタイルで話す手段が１つ失われる。これは、不便なことであろう。コエグ語でも同様であろうと考えられる。

同様のことについて、興味深い経験をしたことがある。筆者が、ナーリム語（スルマ言語群に所属し、南部スーダンで話されている）の調査において、名詞の複数形を聞き出していた。筆者と質問に答えてくれるコンサルタントのまわりに、多くのナーリム語の話し手が取り囲んでいた。ある名詞に関して、コンサルタントがその複数形を答えたところ、

取り囲んでいたナーリム語の話し手たちが、その複数形は間違っている、また、別のナーリム語の話し手がいやもっと別の複数形だと、大騒動になったことがある。ナーリム語の話し手たちとコンサルタントは、相談するから、少し待てということになった。相談の結果、正しい複数形はこのようになりましたと、彼らは答えた。

この事例は、言語の調査としては失敗例であるが、しかし、貴重なことを教えてくれる。それは、以下のように考えられる。複数形成法は、多くの種類が存在し、しかも、どの複数形成法を使用しても、複数であることは表示できる。ただし、どの名詞にはどの複数形成法を使用するのが適当であるかという規則が彼らの言語知識体系に存在する。ナーリム語の話し手たちは、彼らの言語を教える先生であるから、形式ばったときに使う、いわゆる「正しいナーリム語」を筆者に教えてやろうと、考えたのである。

コエグ語は、もはや、名詞の複雑な複数形成法をもっていないので、形式ばったスタイルで話しができなくなっている。少なくとも、名詞の複数形を使い分けることで、形式ばった言い方はできない。

日本語においても分類詞の使い分けが減少するという歴史的変化が生じていると指摘した。日本語においては、歴史的変化の結果、形式ばったスタイルの表現が不可能になったであろうか。そうはならない。若い日本語の話し手は、形式ばったスタイルで会話するとき、できるだけ「わかもの言葉」をまじえずに、日本語を話そうとする。日本語の場合、失われた形式のかわりに、新しい形式が生まれることにより、通時的に失われた弁別が補われるという変化が生じている。一方、死語の脅威にさらされている言語においては、失われた形式や機能を補うための新しい形式が生まれない。死語の脅威にさらされている言語においては、正確な言語継承がおこなわれないために、新しい変化を修正することがおこなわれない。また、失われた形式や機能を補う新しい形式が生まれることもない。

死語の脅威にさらされている言語において生じる変容と、通常の言語変容には、外見的に違いはないと考えられる。違いが存在するとすれば、変容の速度が、死語の脅威にさらされている言語において速いことである。また、死語の脅威にさらされている言語においては、失われる形式や機能を補う形式が新たに生まれることはないと考えられる。

注

1）この小論は、平成 16 年 11 月 10 日、11 日、東京国際交流館・プラザ平成において開催された、第 19 回「大学と科学」公開シンポジウム、『今、世界のことばが危ない！グローバル化と少数者の言語』において、筆者が講演した内容に手を加えたものである。

2）図2は、Sasse, 1992 を参照。

3）詳細は、Hieda,1996 を参照。

4）詳細は、Hieda,1996 を参照。

5）言語交替の過程において、第1言語を第2言語に、第2言語であったものを第1言語に交替する時期が存在する。これら２００人のコエグの人々は、コエグ語を第2言語に、カラ語を第1言語にしたする、つまり、第1言語と第2言語の交替期にあると考えられる。

6）バアレ語の資料は、Yigezu & Dimmendaal 1998 による。

7）Bender は、複数性を表す修飾語が名詞に後続するとき、名詞そのものは単数形が用いられるという現象が、コエグ語以外のスルマ言語群やナイル諸語には存在しないことを指摘するとともに、この現象は、カラ語の影響であると主張している。

参考文献

Brenzinger, Mathias (ed.) 1992. *Language Death.* Mouton de Gruiter, Berlin.

Dimmendaal, Gerrit J. & Marco Last (eds.) 1998. *Surmic Languages and Cultures,* Rudiger Koppe, Koln.

Heine, Bernd & Wilhelm J.G. Mohlig (eds.) 1980. *Language and Dialect Atlas of Kenya. Vol. 1, Geographical and Historical Introduction.* Dietrich Reimer, Berlin.

Hieda, Osamu. 1991. 'Omo-Murle, a preliminary report,' *Swahili & African Studies,* 2:73-91.

1996. 'Multilingualism in Koegu: Interethnic Relationships and Language,' *Senri Ethnological Studies,* 43: 145-162.

1999. 'A typological study of language death-vernaculars and lingua franca-,' *Swahili & African Studies,* 9: 44-59.

Maw, Joan & David Parkin (eds.) 1984. *Swahili Language and Society.* Institute fur Afrikanistik und Agyptologie, Wien.

Sasse, Hans-Jurgen. 1992. 'Theory of Language Death,' in (ed.) Brenzinger, M. *Language Death,* 1992, pp.1-20. Mouton de Gruyter, Berlin.

Yigezu, Moges & Gerrit J. Dimmendaal 1998. 'Notes on Baale,' in (eds.) Dimmendaal, G.J. & M. Last, *Surmic Languages and Cultures,* Rudiger Koppe, Koln.